様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１４日現在

機関番号：15401
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：21653065
研究課題名（和文）　熟達化の視点に立つ説明的文章読解のメタ認知的知識に関する研究

研究課題名（英文）　Research on meta-cognitive knowledge for understanding expository text from the viewpoint of expertize

研究代表者
中條　和光（CHUJO KAZUMITSU）
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：９０１９７６３２

研究成果の概要（和文）：この研究では，(1)説明的文章の読解に関するメタ認知的知識の測定ツールを用いて，児童の文章読解の発達的変容を調べること，(2)同ツールを用いて，教員志望学生や教師を対象として，熟達化による読解指導の変容を調べることを目的とした。読解方略質問紙（犬塚，2002）をもとに小学生用の質問紙を作成し，小学校 4，5，6 年生 368 名を対象として，読解方略使用の学年差を調べる調査を実施した。また，同質問紙を用いて，実習による教員志望学生の学習者観の変化を調べた。

研究成果の概要（英文）：The purposes of this study were to investigate developmental modification of use of strategies for reading expository text in elementary school children, and to investigate the relationship between the expertize in reading instruction and use of reading strategies for intending teachers. The developmental modification between fourth and sixth grader in elementary school was investigated using a questionnaire about the use of reading strategies. And using same questionnaire we investigated whether the changes of intending teachers' meta-cognitive knowledge on reading instruction was influenced by attending the teaching practice.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	500,000	0	500,000
２０１０年度	500,000	0	500,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	150,000	1,650,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：教育系心理学，認知科学，学習過程，文章理解，メタ認知，教師教育

１．研究開始当初の背景

PISA 調査や全国学力テストの結果から，児童生徒の読解力に課題があることが指摘されている。説明的文章の読解は様々な教科の学力の基底に位置づけられることから，読解力を向上させる指導法の改善が求められている。そのためには，説明的文章の読解の熟達化やそれを促す読解指導の方法を検討するために，具体的，客観的に読解のメタ認知過程の変容を測定するツールの開発が不可欠である。また,それを用いた教育実践研究が必要となる。

現行の学習指導要領のもとでは，各教科を通して「自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する能力」という確かな学力を形成することが求められている。この学力観と PISA 調査の読解力の観点には共通するものがある。このような読解力の育成に関して，心理学領域では，学習行動をモニターし制御するメタ認知活動の訓練とそれを支えるメタ認知的知識の形成が必要であるとし，読解方略の訓練やメタ認知活動自体を訓練する互恵的学習法などの実践研究が行われている。

しかし，それらの研究では，メタ認知的知識，すなわちモニターや制御に関わる方略に関する知識がどのように変容するのかを具体的，客観的に測定・記述する手段が準備されておらず，訓練の成果を課題の達成度の量的変化で検証するにとどまっている。そこで，本研究では，説明的文章の読解のメタ認知的知識を記述するツールを開発し，それを用いて児童生徒の説明文読解のメタ認知的知識の発達的変容や教員志望学生等の読解指導の熟達化によるメタ認知的知識の変容を調べる。

２．研究の目的

この研究では，(1) 説明的文章の読解に関するメタ認知的知識を記述するツールを開発し，児童生徒の説明的文章読解の発達的変容を調べること,(2)読解に関するメタ認知的知識を記述するツールを用いて，教員志望学生等の読解指導の熟達化に伴うメタ認知的知識の変容を調べること,(3)いわゆる PISA 型読解力に対応する読解のメタ認知的知識として図表を含む説明的文章の読解に関するメタ認知的知識を記述するツールを開発し，読みの熟達化と方略使用の関係を調べることを目的とする。

３．研究の方法

本研究では，以下のような方法を用いた。

(1)児童生徒用の記述のツールとして，犬塚（2002）の作成した説明文の読解方略リストを改変した方略リストを作成し，それを用いて，学年や読書経験による方略使用の差異を検討した。

(2)犬塚（2002）と同様の方法を用いて読解と表裏一体の関係にある産出の方略リストを作成し，児童への学習指導経験を重ねることによって教員志望学生の説明文産出方略の使用がどのように変化するのかを検討した。

(3)犬塚（2002）の方法を踏襲し，非連続テキスト（図表）を含む説明文の読解方略リストを作成し，読みの熟達の程度と方略使用の関係等を検討した。

４．研究成果

(1)児童の説明文読解のメタ認知的知識の変容について

読解方略質問紙（犬塚，2002）をもとに，小学生用の読解方略質問紙（質問項目数 28 個）を作成し，小学校 4，5，6 年生 368 名を対象に，読解方略使用と読書経験との関係を調べる調査を実施した。各学年の方略使用の実態及びそれぞれの学年における読書経験と方略の使用との関係を記述的に研究した。現在，発表準備中である。

(2)学習指導経験による教員志望学生の説明文産出方略の使用の変化について

犬塚（2002）と同様の方法で,「表記・表現の容易性」,「流れやまとまりに対する配慮」,「読み手の興味・関心への配慮」,「具体性」,「説明すべきものの先行提示」の 5 カテゴリー，30 項目からなる宣言的知識を説明する文章（宣言的説明文）の産出方略リストを作成した。作成された方略リストについては，教育心理学会第 53 回総会等で発表した。

この方略リストを用いて，学習指導の経験が教員志望学生の説明文産出方略の使用に及ぼす影響を調べた。小学校高学年，中学生を対象とする認知カウンセリング（算数，数学の個別指導）の経験と文章産出方略の使用との関係を，認知カウンセリング（週 1 回，10 週間実施）の事前事後に調べたところ，個別学習指導の初心者の方略使用が，10 週間の指

導経験後には，経験者の方略使用に近似してくること，特に具体的に説明するための方略使用で有意な変化が見出された。この結果は，指導対象の児童生徒の特性に応じた説明産出を行うようになったと解釈され，大学における教員養成カリキュラムを補完するものとして，認知カウンセリングの体験が有効であることが示唆された。

以上の成果は，学会発表準備中である。

(3)非連続型テキストを含む説明文読解のメタ認知的知識について

PISA2009 年度調査において，日本の児童生徒の読解力の低下には歯止めがかかり，問題によっては上昇傾向が示された。それでも，テキストの形式別に正答率を見ると，データを視覚的に表現した図やグラフ，表やマトリクス，技術的な説明図などの「非連続型テキスト」と，非連続型テキストと文章を組み合わせた「混成型テキスト」の読解について，正答率が 2000 年度調査に比べ低いことが示された（国立教育政策研究所 2009)。そのために，こうした非言語情報を含めたテキストの読み取りや，それらを活用する力の基盤となる言語力を高めるために，文章や資料等を活用し，論理的に考え，表現する力の育成が求められている。

そこで，図表のような非連続型テキストを含む説明文の読解方略リストを犬塚（2002）の方法によって作成した。方略リストは,「文章があらわしていることを図によって確認しながら読む」といった図表の活用,「各文は簡単に言うとどういうことかを考えながら読む」といった意味明確化,「文字のフォントが異なる文やことばに注意する」といった標識の活用,「分からないところは繰り返し読む」といったメタ認知的活動,「自分が今まで知っていることと比べながら読む」といった既有知識活用の５つの方略のカテゴリーからなる 29 項目の読解方略からなる。

このリストを用い，図を伴うマニュアル文章を読解材料として，読解の熟達度と方略使用の関係を調べたところ，熟達した読み手のほうが，図表の活用，標識の活用の 2 方略を有意に多く使用していることが見出された。この結果は，非連続型テキストを含む説明文の指導に示唆を与えるものである。

今後の課題について

本研究によって明確になった今後の課題を以下に上げる。

(1)読解のメタ認知的知識に関する研究課題

読解の過程は，読みの目的（例えば，試験対策）に応じて文章を読み，読後に目的が達成されたか（試験準備として十分な読みができたか）を判定するまでの一連の過程と考えられる。したがって，読解のメタ認知過程は読みの目的の設定，読解対象や読みの目的に応じた読み方の設定，読解過程における読解の状態のモニタリングと制御，読後のモニタリングと制御のように，読解の段階ごとに想定されるものである。しかしながら，本研究では，そのような段階を考慮せずにメタ認知的知識の収集整理を行った。そこで，読解の各段階におけるメタ認知過程について詳細な研究を行うことが必要となる。

(2)教員養成，教師の資質向上に関する課題

方略リストは直接的には読解指導の改善に資すると考えられるが，それに加えて，方略リストを教員養成カリキュラム自体の到達度評価として活用すること，教師の省察の手段として活用することが可能である。本研究では，現職教員を対象とした調査研究も計画したが実施に至らなかった。学習指導の熟達度と読解方略使用との関係を調べ，その結果を教員養成で利用したり，研修等の機会に初任教員の指導の振り返りに利用したりすることで，資質向上をはかることができると考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

1.　山田恭子・近藤　綾・畠岡　優・篠﨑祐介・中條和光，説明文産出におけるメタ認知的知識の構造,広島大学心理学研究,査読無,第 10 号，2011，13-16

2.　山田恭子・堀匡・國田祥子・中條和光，大学生の学習方略使用と達成動機，自己効力感の関係,広島大学心理学研究,査読無,2010,第 9 巻，37-52

〔学会発表〕（計３件）

1.　山根崇史・近藤綾・中條和光，読み手の違いが説明文産出時の方略使用に与える影響,中国四国心理学会第67回大会，2011年11月12日，比治山大学

2.　畠岡優・山田恭子・近藤綾・中條和光，

宣言的説明文の産出におけるメタ認知的知識の構造，日本教育心理学会第 53 回総会，2011 年 7 月 25 日，札幌市　北翔大学
3.　黒岩　督・佐々木陽子・中條和光，新たなアスペクトへの気づきを促す国語科授業の構成，日本教授学習心理学会第６回年会，2010 年 7 月 18・19 日，札幌市　北海学園大学

〔図書〕（計２件）
1.　宮谷真人・中條和光（共編著），ミネルヴァ書房，心理学研究の新世紀第 1 巻　認知・学習心理学，2012，1-579
2.　森　敏昭・岡　直樹・中條和光，培風館，学習心理学　理論と実践の統合をめざして，2011，　1-258

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　中條　和光（CHUJO KAZUMITSU）
　広島大学・大学院教育学研究科・教授
　研究者番号：９０１９７６３２

(2)研究分担者
　黒岩　督　（KUROIWA MASARU）
　兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
　研究者番号：８０１５３３９４

(3)連携研究者
　　（　　）

　研究者番号：